

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月30日現在

機関番号：42624

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22500953

 研究課題名（和文） 学生間コミュニケーションを活性化するシステムを核とした  
キャリア形成支援プログラム

 研究課題名（英文） Development of Career Support Program centered on  
Activation of Communication between Students

研究代表者

豊田 雄彦 (TOYODA YUHIKO)

自由が丘産能短期大学・能率科・教授

研究者番号：80331411

研究成果の概要（和文）：本研究は就職活動体験を綴った「就職活動体験記」を通じた交流を通して、学生の働くことへのリアリティの醸成を目指し、そのポートフォリオの解析を通してキャリア教育プログラムの開発、改善を行おうとするものである。「就職活動体験記」およびその読者による「受け止め」の記述内容をテキストマイニングの手法を用いて分析することにより、「就職活動体験記」の記述およびその記述内容を通じた交流の効果を測定した。その結果、経済、雇用情勢の厳しい時期の就職活動体験は、自らの職業観・勤労観におよぼす変化が顕著に見られること。体験記の読者は就職活動の早期のイベントに興味を示す傾向があること。また早期に活動すべきと考えた読者は実際に早期に就職活動を開始する傾向があること。適切な授業プログラムの実施により、失敗体験を下級生に伝承し、下級生の就職活動に資することができることを確認できた。

研究成果の概要（英文）：The propose of this research is to develop the career support program for students by analyzing “Students Job search experiences” and “Readers comments on other students’ Job search experiences ”using text-mining method. The students will have reality about the world of work by communicating among other students through “Students Job search experiences”. There are main results of this research as followings;

- 1) There are differences in the description about view of working and vocation in “Students Job search experiences” depends on the employment situations.
- 2) The Readers tend to be interested in the early stage of job search activities.
- 3) The Readers who write comments “It is better to start job search activities earlier” tend to start job search earlier.
- 4) The description of senior students’ failure experiences in “Students Job search experiences” help junior students’ job search activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,500,000	0	2,500,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,600,000	330,000	3,930,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学 教育工学

キーワード：キャリア教育、テキストマイニング、主題分析、就職活動、感情体験

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

### 1. 研究開始当初の背景

若者の自立と就業への支援は、高等教育機関における大きな課題となっている。特に大学教育の文脈で醸成される就業イメージと卒後の現場に就業してからの体験との間に生じるギャップが若年者の早期離職の要因とも考えられている。若年者の早期離職は、本人のキャリア発達上の損失に加え、社会的にも人材育成面でのロスとなるなど、大きな問題を含んでいる。企業と大学教育におけるキャリア教育の難しさは、具体的には次のような乖離としてよく指摘される。すなわち新卒者に対して企業側から求められる基礎学力とコミュニケーション能力の不足や働くことについてのリアリティ獲得の未達などが指摘される一方、大学のキャリア教育に携わる側では、企業が求める人材像やリソースとして求める能力の具体的要素がめまぐるしく変化し、教育現場までうまく伝わらないという点である。

本研究では、学生の働くことへのリアリティの醸成に焦点をあて、そのためのキャリア支援プログラムの開発とプログラムを有効化するためのマネジメント・システムの構築を主眼としている。具体的には学生に「就職活動体験記」を作成させ活用することをプログラムの中心に据える。学生が作成したポートフォリオの解析をとおしてキャリア教育プログラムの開発、改善を行おうとするものである。

### 2. 研究の目的

今回の研究では、現在も蓄積され続ける学生の学習ポートフォリオをデータベース化し、後輩や同輩がキーワード検索によって個々のケース文書を閲覧することで新しい自学・自習システムを構築し試行運用すること、さらに学生が就職活動やキャリア形成活動の過程で直面する諸課題や感情体験と、キャリア教育・支援スタッフのイメージする学生像との間に起こる齟齬や乖離の実情を拾い出すことができる。また、これらの情報を基にして構築されるデータベース・システムは、迷いや戸惑い、焦燥等の感情体験に対し心理的な支援を与える源泉となり、働くことへのリアリティの醸成を促すことができると考えられる。また年度ごとの学習ポートフォリオを分析することにより、プログラムの学習効果も測定できると期待している。

### 3. 研究の方法

本研究では以下の手順にしたがい研究を実施した。

#### 1) 学生により記述された「就職活動体験記」

のデータベース化を行い、学生であれば閲覧可能な形にする。データベースは主題分析を通して、主題と用語両面での検索可能なものとする。

2) 下級生に本データベースの開示を行い、就職活動の追体験を行う学習を実施する。その際の検索行動をも記録する。

3) 「就職活動体験記」へのアクセス行動をデータ・マイニングすることで、下級生のキャリア準備過程における検索行動の解析を行う。その結果等についてはキャリア支援教育プログラムに反映し、さらなる改善を図る。

4) 作成されたデータベース・システムを活用し得る新しいキャリア支援教育プログラムのあり方について検討を行ない、次世代型キャリア教育プログラムへの提言をまとめる。

### 4. 研究成果

本研究では、就職活動の既体験者(短期大学2年生)による「就職活動体験記」を就職活動「前夜」の1年生に先行学習経験のテキストとして与える可能性について検討した。就職活動・既体験者の報告記述の中に現れる頻出語と、その語を含む文脈、およびそれら頻出語に共変する関連語を検討した結果、「遅刻」など経年的な就職市場の変動と合わせて効果のあり方を考慮する必要のある用語も検出された。頻出語とそれらを含む文脈には記述者の感情体験が示唆され、今後、学生が自発的に学べるデータベースを構築する可能性と価値が確認された。

「就職活動体験記」にテキストマイニングの手法を用いてカテゴリ化を行い、「悲しい」「困っている」「不満」「不安」「諦め」などネガティブな感情体験に関連する記述の分析を行った。その結果、「試験、面接の結果」「活動準備と探索活動」「人間関係による支援」「面接場面での体験」などの中心的な類型が示された。また、説明会や試験会場にたどり着くことに失敗するという記述例が、単純に事例研究として読んでいた際の印象以上に多いというデータも示された。教職員の事前の適切な指導介入により、この問題の発生は減らすことができる。データ解析によって有益な示唆が得られた例である。一方で、個別の事案についてデータ解析からすべてを検証できない「サイン」が示される場合もあると確認された。その際は原文の記述に立ち返り、必要に応じて対面的な相談場面に導入するなど、最終的には「人対人」の課題とする必要もある。キャリア支援の「基本」が確認された。教室場面で収集されるマス・データの初動処理として有益な所見を得るこ

とができるという価値から、今後もテキストマイニング手法の適用可能性の検討は継続

されるべきである。

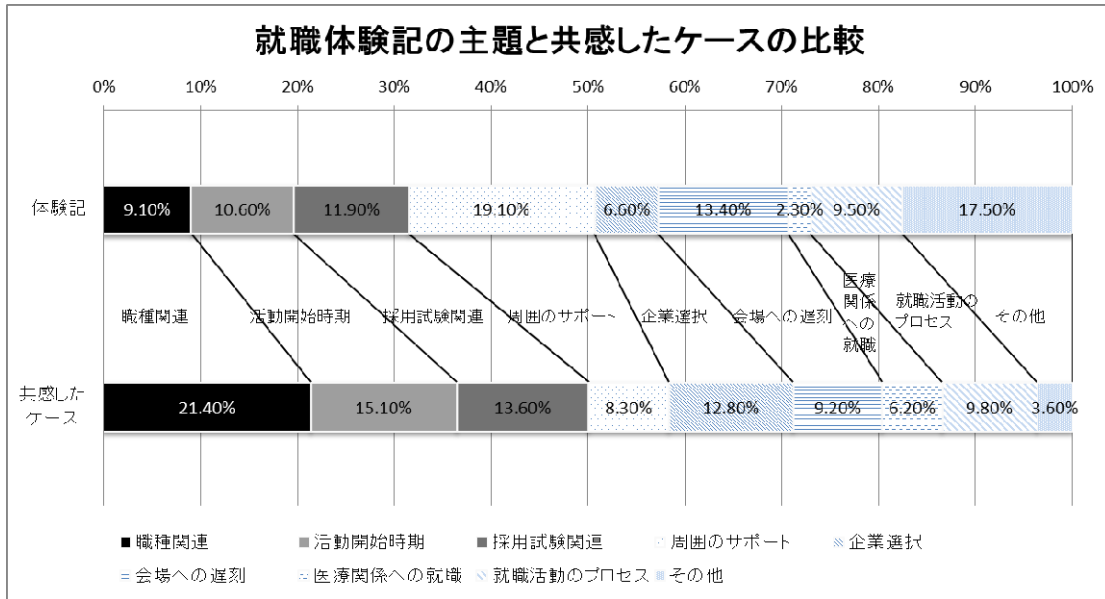


図1 就職活動体験記の主題と共感したケースの比較

就職活動既体験者が作成した「就職活動体験記」のキャリアガイダンスツールの意義が明らかにされている。

1年生がレポート課題の中で通読した就職活動体験記の主題と「共感したケース」の主題の比率を比較すると図1のようになる。

内定を獲得するまでの就職活動のプロセスは、自己分析や情報収集を行う時期（活動準備期）、選考を受ける企業を選択し、応募書類を送付するまでの時期（活動初期）、採用選考を受ける時期（活動本格期）、内定を獲得し活動を終了する時期（活動終了）に大まかに区分することができよう。

「就職活動体験記」では「周囲のサポート」や、「会場への遅刻」といった活動本格期に関する主題が多い。一方で、「共感するケース」の主題では、業種関連、活動開始時期、企業選択といった活動初期段階に行う活動やそれに関連する主題に学生が共感している傾向を、図1からみることができる。

またこれから就職活動を体験する学生にとって「就職活動体験記」を読むという学習プログラムの有効性についても検討した。「就職活動体験記」で取り扱われる主題の中でも、就職活動初期に関するものに対して学生は関心を示しており、これから体験する就職活動に対するリアリティの醸成に一定の効果があることが看取できた。また、体験記に対する学生の受けとめ内容と実際の就職活動の関連性についての分析から、「早く活動する」等の具体的な言及は実際の就職活動

に影響を及ぼすことが分かった（表1参照）。

表1 「早めの活動」への言及とキャリア支援センターへの相談開始時期

			相談開始		合計
			早い	遅い	
早めの活動	言及なし	度数	185	109	294
		比率	62.9%	37.1%	100.0%
言及あり	度数	55	14	69	
	比率	79.7%	20.3%	100.0%	
合計		度数	240	123	363
		比率	66.1%	33.9%	100.0%

バブル経済崩壊後の就職状況は「就職氷河期」と評されたが、リーマンショック、東日本大震災から日本経済が受けたダメージは一時回復していた就職状況を悪化させ、「就職氷河期」が再来することとなった。こうした中、就職活動を行っていた学生の心中は想像に難くない。しかしこのような厳しい経験が将来の「生きる力」に繋がっていくと予想される記述が体験記の中に見られた。例えば「幅広く」という単語が出現するのは、2009年度に7件、2010年度～12年度にそれぞれ5件と2008年度以前の記述には見られない。同様に「視野」という語も2007年度は3件、2008年度は10件、2009年度は60件、2010年度は60件、2011年度は40件、2012年度

は49件と2009年度を境に急増している。

インターンシップなどの啓発的体験や課題解決学習などを通して職業観・勤労観を育成することが考えられるが、就職活動そのものも職業観・勤労観の育成に大きな役割を果たしていると考えられる。大久保幸夫が「筏下りと山登り」で主張しているように、自らのキャリアを築いていくために就職後10年

程度はさまざまなことにチャレンジし、自らの基礎力を磨き、その中で職業観や勤労観を確立していくものである。就職活動を通して、そのような意気込みと柔軟性を獲得できるのであれば、極めて有意義な体験であったのではないかと考えられる。そのような教育的効果も含めて、今後、学生の就職活動を支援していくことが考えられる。

表2 推測された主題とその変動の傾向

想定される主題	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	総計	変動の傾向
周囲のサポート	19.2%	17.3%	15.8%	17.6%	13.8%	15.0%	16.4%	
会場へのアクセス(遅刻)	12.1%	15.3%	14.3%	12.8%	14.4%	7.9%	13.1%	
就職開始時期	5.5%	7.1%	7.7%	10.0%	11.6%	13.1%	9.2%	
面接試験	14.7%	11.5%	9.8%	8.3%	7.6%	7.0%	9.6%	
筆記試験	2.9%	3.0%	3.4%	2.7%	2.9%	2.0%	2.9%	
エントリー	3.0%	2.7%	4.0%	2.9%	3.1%	4.9%	3.4%	
職種決定	2.7%	3.0%	3.9%	4.9%	4.3%	4.3%	3.9%	
会社からの連絡	3.3%	3.1%	2.0%	1.0%	0.8%	0.5%	1.8%	
就活準備	1.8%	1.5%	1.8%	2.4%	2.7%	2.4%	2.1%	
ファッションと就職	0.9%	1.3%	1.5%	2.7%	2.1%	2.5%	1.9%	
医療関係の仕事	1.2%	2.2%	1.9%	2.5%	2.5%	1.6%	2.0%	
就職活動プロセス	2.4%	2.1%	2.1%	2.4%	2.9%	2.5%	2.4%	
試験結果	5.7%	8.7%	5.9%	6.7%	5.7%	8.5%	6.9%	
支援センターのサポート	2.8%	3.9%	5.4%	5.1%	4.5%	7.1%	4.9%	
希望との折り合い	3.7%	2.7%	2.6%	2.3%	4.1%	3.5%	3.0%	
会社の対応	3.3%	3.1%	2.6%	2.1%	2.2%	1.9%	2.5%	
結果のふりかえり	1.7%	1.7%	2.0%	1.6%	1.4%	1.8%	1.7%	
その他	13.1%	9.9%	13.3%	11.9%	13.3%	13.7%	12.4%	

適切な授業プログラムの実施により、失敗体験を下級生に伝承し、下級生の就職活動に資することができることも確認できた。「会場へのアクセス(遅刻)」を主題とする記述は就職状況とは無相関に一定の割合の記述があったが、2012年度になって初めて割合が減少した(表2参照)。これは「大学生の就業力育成支援事業」採択により本学のキャリア教育カリキュラムを変更し、体験記を「学びのサポート」ではなく「就業とキャリア考」で記述するようになった影響も考えられる。「就業とキャリア考」では前学期に就職活動や就職後の先輩のケースなどを分析することにより、自らのキャリア形成を考える契機になることを企図している。会場へ遅刻したというケースは体験記として比較的書きやすい主題であるが、自らのキャリアの第一歩としての就職活動体験の記述としては内容が希薄なものであると感じたのではないかと考えられる。

就職活動体験記からは筆記試験をはじめとする汎用的・基礎的能力の検査で困難を感じる学生がいることが観測された。そのような学生に対して教育の充実と厳格なスキルの測定を通じて質保証を行っていく必要があると考えられる。西村和雄らが指摘しているように、本来小学生時点で獲得していなければならない能力を大学卒業後も獲得していないのは明らかに問題である。就職試験でそうした能力に関する検査が行われるのは、

学習のための一つの誘因になるであろう。基礎的能力が不足しているために、キャリアの第一歩を踏み出すことができないのは大きな損失である。

体験記の記述内容は就職環境の変化に応じて変化することが確認できた。先輩からの伝承は学生の就職活動に大きな影響を与えることができると考えるが、このような環境の変化があった場合に、教員からのフォローも必要であろうと思われる。安易な成功体験の伝承にとどまることなく、体験記から就職活動の本質を読み取り、自らの行動を律していくようにすることが望まれる。

就職活動に関する失敗に関しても「失敗学」における「失敗知識データベース(失敗まんだら)」のような形に学生自身に整理させる、あるいは提示することが、より有効な知識の伝承として役立ち、学生の行動のなかにマネジメントサイクルを確立することにつながるのではないだろうか。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① 豊田雄彦、竹内美香、石嶺ちづる、「就職活動体験記」主題の経年変化の分析、自由が丘産能短期大学紀要第46号、2013年、P1-P13、査読有

②石嶺ちづる、豊田雄彦、竹内美香、テキストマイニング手法による「就職活動体験記」に対する学生の所感分析、自由が丘産能短期大学紀要第 45 号、2012 年、P45-P59、査読有

③竹内美香、豊田雄彦、石嶺ちづる、「就職活動体験記」に頻出する感情体験表現と出現文脈の検討、自由が丘産能短期大学紀要第 44 号、2011 年、P55-P73、査読有

④豊田雄彦、竹内美香 他、テキストマイニングによる「就職活動体験記」の分析、自由が丘産能短期大学紀要第 43 号、2010 年、P1-P13、査読有

[学会発表] (計 2 件)

①石嶺ちづる、就職活動体験による勤労観・職業観の醸成に関する予備的考察 —テキストマイニング手法による「就職活動体験記」を中心とした主題分析を手がかりに一、日本産業教育学会 第 53 回大会、2012 年 10 月 21 日、金沢

②豊田雄彦、「就職活動体験記」によるキャリア形成支援プログラム、私立大学情報教育協会 教育改革 ICT 戦略大会、2012 年 9 月 6 日、東京

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

豊田 雄彦 (TOYODA YUHIKO)

自由が丘産能短期大学・能率科・教授

研究者番号：80331411

### (2) 研究分担者

鈴木 美香 (SUZUKI MIKA)

自由が丘産能短期大学・能率科・准教授

研究者番号：70259034

石嶺 ちづる (ISHIMINE CHIZURU)

自由が丘産能短期大学・能率科・講師

研究者番号：80551655